

「しゃべれる林業家」を目指して

はらしま みきのり
森林インストラクター **原島 幹典 氏(高校28期)**

東京都奥多摩町在住、約40ヘクタールの山林を所有
1976年 立川高校卒業
東京農業大学農学部林学科卒業
元、岐阜県立森林文化アカデミー教授
現、奥多摩・都民の森 林業体験インストラクター
奥多摩町教育委員会 教育長職務代理者
東京都の林業振興に向けた専門懇談会委員
東京都 緑の雇用集合研修講師
文教大学文学部非常勤講師
森林インストラクター



■学生時代

中学時代を冬とすれば、私の高校時代は希望に満ち溢れた春となるはずであったが、ふと気がつけば劣等感につぶされた空虚な自分がいた。大学受験にも失敗し、浪人で1人暮らしを始めたころから自分を客観視することを覚え、大学時代は霧が晴れたように楽しい時間をむさぼった。

親の苦勞も顧みず、まともな就職活動もせず、結果として実家を継ぐ道を選んだのだが、これが大きな人生の転換点となった。自分の役割、立ち位置が明確になったことで迷いが吹っ切れた。中規模の森林所有者として、林業経営で生き残るための道を探るべく、二つ目の大学で林業を学びながら、集約経営で名高い京都北山に一年間の現場修行に出た。しかし、時代の流れに取り残された田舎の自営業の現実に打ち砕かれ、25歳の青年は再び自分を見失うことになる。

■林業家として

ふらふらしながらも趣味を通じて妻と巡り会い、結婚を機に地元の会社に就職し、3人の子を持つ親となり、40歳手前で父が亡くなったことを機に再度自分の役割や立ち位置を思い出し、自営の道に再挑戦することにした。その時に自分のキャッチコピーができた。「しゃべれる林業家」である。そのころ、全国的に都市住民が水源地の森の窮状を救うべく、森林ボランティア活動が活発化し、多くの人が森林林業に関心を寄せてくるなか、現場で作業を体験するときに、作業の目的や道具の使い方を説明をしたり、けがをしないよう的確な指導を行う人間の需要が高まった。概して山の人は口下手であり、しごとは見て覚えろ、が普通であったため、私のように山と街の両方に足を掛けて生きて来た中途半端な人間はかえって適任であったように思う。その居場所を与えられたことで、一気に世界が広がり、色々な場所で話をする機会を得た。都会の人たちは町の感性で森や田舎の話をする人間を歓迎してくれた。

■森林インストラクターとして

そうこうしているうちに、ある方から某県立の森林に関する専門学校の教員にならないかとお誘いを受けた。それも常勤の地方公務員としてである。初めから脱輪した生き方をしてきた私にとっては驚きの展開である。こんなチャンスは二度とないと思い、妻の許しを得て単身赴任し、定年まで実に12年間もお世話になった。それなりの苦勞はあったが、わが子たちが不自由なく育ちそれぞれの道に巣立って行けたのは、この12年間私を雇ってくれた某県民の皆様のおかげだと感謝している。脱サラ前に森林インストラクターという資格を取得した。これも大きな転機となった。今も私が関わらせてもらっている仕事の70%はこの職域である。「しゃべれる林業家」を目指したことがその後の人生の充実をもたらしてくれた。私にとって大切なキャッチコピーである。

■立高生へのメッセージ

夢や目標を持てる人は突き進めばよい。持てない人は焦らずに出番を待てばよい。
ただ、自分を信じて磨かない人に出番は来ないよ。
成功体験より失敗体験の方を大切にしてください。